

序

木立雅朗先生は、2026年3月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の積年のご功績を称えるとともに、その学恩に深い感謝の意を表するため、ここにご退職を記念する論集を編み、先生に謹呈させて頂くことにしました。

木立雅朗先生は石川県のお生まれで、1984年3月に立命館大学文学部史学科をご卒業されました。その後、1987年6月から石川県立埋蔵文化財センターで嘱託としてご勤務され、1989年4月より石川県立埋蔵文化財センター主事となりました。立命館大学には1995年4月に文学部助教授としてご着任され、2004年4月には同学部の教授になりました。本学ご着任から31年間の長きにわたり本学の研究・教学をずっと牽引されました。

木立先生は、とくに古代の須恵器生産や瓦生産を中心に、近世から近現代における京焼を民俗考古学的手法で検討し、その際には民俗調査や実験考古学的手法も援用し、歴史学としての考古学の研究方法を模索されておられます。そうしたご研究の延長として、京都の伝統工芸に関わる民俗考古学的調査にも携わってこられました。京焼、和鏡、唐紙の民俗調査を行うとともに、友禅染・西陣織の図案を収集し、モノを中心にしながら道具・人・製品の結びつきについて考察を展開しておられます。このように窯業に関わる考古学研究はもちろん、京都学研究の発展にも尽力されてこられました。

また木立先生は、研究・教育のみならず、大学組織の運営においても長年にわたり多大なご尽力を重ねてこられました。学部・学域・専攻における諸業務をはじめとして、教学運営や組織運営の要となる役割を数多く担われ、常に大学全体の将来を見据えた誠実かつ着実なご対応によって、学内外から厚い信頼を寄せられてきました。その一環として、木立先生には立命館史資料センターのセンター長もお務めいただき、本学の歴史的基盤を支える中核的な役割を果たしてこられました。

立命館史資料センターは、立命館の歩みと理念に関わる史資料を体系的に収集・保存し、現在および未来に向けて有為な利活用を図ることを目的として設置された組織です。近代日本を代表する政治家であり国際人でもあった西園寺公望が1869年に私塾「立命館」を創設し、その精神を継承した中川小十郎が1900年に京都法政学校を開いたことに始まる、立命館の歴史と精神を学内外に伝え、次世代へと継承していくうえで、同センターはきわめて重要な役割を担っています。木立先生はその責任者として、史資料の学術的価値と公共的意義を見据えながら、センターの運営と活動の充実に尽力されてこられました。

先生のお人柄は、深い正義感を、にこやかなユーモアで包み込まれたものでした。少しはにかむように、笑みがこぼれるのをどこかで抑えながら、折にふれてユーモアを交えつつお話くださったお姿を、今もよく覚えております。

私の思い出でいえば、立文会（立命館大学文学部教職員の懇親会）において、たまたま隣席になったときのことです。木立先生は私に向かって、「先生はそろそろ不惑ですか」と突然お尋ねになりました。「不惑」どころか、すでに「知天命」の年も越えていた私に

としては、それが冗談であったのか、それとも本気であったのか、即座には判断がつかず、ただ笑みを浮かべてやり過ごした記憶があります。

このように、木立先生の言葉は、冗談なのか本気なのか一瞬ためらわせるようなところがございました。そうした柔らかさを帯びながらも、ひとたび語るべき場面においては、常に筋の通った考えを明確にお示しになりました。その温和さと揺るぎない姿勢の両立こそが、多くの同僚や後進から深い信頼と敬意を集めてきた所以であったといえましょう。どこかユーモラスな温和さと揺るぎない姿勢は、何よりも学生や大学院生に向けられていると私には感じました。そのため木立先生を慕う学部生や大学院生が多くいることも納得できるものです。

先生には2026年4月からも特別任用教授として、しばらくは引き続き教鞭をとって頂けることを、大変ありがたく存じております。木立先生には今後とも、立命館大学、文学部、文学研究科へのご助言・ご指導を賜ることができれば幸甚に存じます。

2026年1月

立命館大学人文学会会長

文学部長・文学研究科長

遠藤英樹